

# 世代共感

チェ・ダリョンのソウル暮らし

서울생활사박물관  
기획전시실

2020.12.08.TUE

2021.03.28.SUN

## 展示開会のご挨拶

ソウル生活史博物館は、ソウルでの暮らしを一緒に辿っていけるような展示を通じて多様な世代が疎通し共感できる世代共感の場を追求しています。20世紀後半の半世紀の間、ソウルとソウルでの暮らしはあまりにも急激な変化を経ていて、その変化は、韓国が日本から独立した1945年に生まれた『ヘバンドウンイ』の人生にそのまま溶け込んでいます。独立の感激と共にこの世に生まれた『ヘバンドウンイ』は、生まれて直ぐに貧しさと惨憺たる現実と直面しました。試練と逆境を克服し成功を収めた『ヘバンドウンイ』の人生は、『漢江の奇跡』という驚くべき成果を達成した韓国社会の発展と同じ流れを辿っています。

ソウル生まれの『ヘバンドウンイ』チェ・ダリョンさんの学校・職場・結婚生活などを社会学者の目線でみることで、1950~70年代のソウルでの暮らしを一緒に感じ取ってみたいと思います。チェ・ダリョンさんは、ソウルと共にした人生を記録するために生涯に渡って資料を集め、その一部の1,181点をソウル歴史博物館とソウル生活史博物館に寄贈されました。青年チェ・ダリョンが暮らしたソウルでの日常と重要な人生の岐路を一緒に辿ってみることで、当時のソウルの様子と『父親の世代』の青年時代の暮らしを垣間見て共感する機会になることを願っております。

ソウル歴史博物館長  
ペ・ヒョンスク

## 1部

### ソウルと1945年生まれの成長

韓国の現代史は、世界史を揺るがした2回の戦争と共に始まった。太平洋戦争が、韓国に独立という思いがけない贈り物を与えたとすれば、韓国戦争は、同じ民族を敵同士にしてしまった骨肉の争いの傷と深刻な政治理念的分裂を残した。1945年、35年間の長い植民地支配から解放された感激の歓呼と共に生まれた『ヘバンドウンイ(解放ベビー)』がきらきら輝く瞳で初めて立ち向かった現実には、貧しくて惨憺たるものだった。

3年間続いた戦争は1953年の休戦協定と共に終わったが、戦後の復旧には時間がかかった。人々は戦争の傷と貧しさから抜け出すために必死だったが、1950年代には、政治は混乱し、暮らし向きはなかなかよくならなかった。4・19革命と5・16軍事政変を経て朴正熙(パク・チョンヒ)政権が登場し、韓日国交正常化とベトナム戦争派兵が断行された1960年代半ばに入って、韓国経済は成長しはじめた。『ヘバンドウンイ(解放ベビー)』世代は青少年期に政治的激動の現場に参加した4・19世代であり、韓国経済の成長を導いた産業化の最初の世代だった。



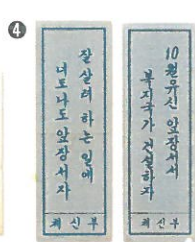
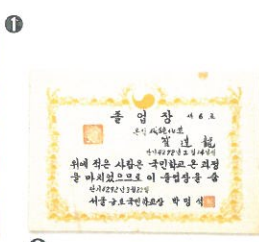
① ナムデムン(南大門)市場周辺の廃墟 1950

② 江南総合バスターミナル周辺工事の全景 1978

## 2部

### 避難、間借り、そして弁理士になるまで

チェ・ダリョンは、光化門の近くで2男3女の内の第4子として生まれた。5歳の時に韓国戦争が勃発した。彼は戦争を突然降り注ぐ爆撃の恐怖と時々鳴り響くサイレンの不安感で記憶している。彼の家族は1950年12月、京釜(キョンブ)線の列車に乗り込んで、遅ればせながら避難した。戦争が終わった後、彼は家族と一緒にソウルに戻り、新堂洞のある古くて傷んだ多世帯住宅で10数世帯と一緒に暮らした。チェ・ダリョンは小学校6年生の1958年について正規教育を受けることができ、10代には『入試地獄』の学齢期を経た。貧しい家庭環境にもかかわらず、学業を終え、就職し結婚して家庭を築いた。試練と逆境を乗り越えて成功した『ヘバンドウンイ(解放ベビー)』の人生は『漢江(ハンガン)の奇跡』という驚異的な成功を成し遂げた当時の韓国社会の発展と軌を一にする。青年時代のチェ・ダリョンの人生を描いた記録と資料を通じて、1950~1970年代の『ヘバンドウンイ(解放ベビー)』世代の生活の軌跡を探る。



- ① 中学校の入試本 1957
- ② 卒業証書 1959, チェ・ダリョン
- ③ 100億ドル資料 1970年代
- ④ 10月維新標語 1972
- ⑤ 結納時計 1975, チェ・ダリョン
- ⑥ 電気炊飯器 1975, チェ・ダリョン
- ⑦ 弁理士登録証 1983, チェ・ダリョン



## 3部

### 我々、ソウルで生きていく。

20世紀後半の半世紀の間、ソウルが経験した桑田碧海の変化は、その激動の時空間を心の中に原風景として持っている多くの世代の間にそれぞれ違った価値観と世界観を作り出した。1930年代に生まれた植民地・戦争体験世代、1950年代に生まれた産業化世代、1960年代に生まれた民主化世代、1980年代に生まれた脱冷戦・情報化世代など色々な世代が存在する。人は誰もが世の中に投げ出された存在だから、自分に与えられた時空間に適応して生きていく。今日、ソウルには「漢江の奇跡」の出发点と到着点間の距離ほど、それぞれ異なる時代像を心の中に抱いている様々な世代が共存している。同じ時代を同じ空間で生きているものの、彼らはどれほど異なった時代に止まっている異質な存在なのだろうか。



- ① 明洞行人 韓致奎, 1965
- ② ギターを肩に担いで足を運ぶ青年 洪淳泰, 1975
- ③ 新世代と旧世代 洪淳泰, 1969